



工場の入口にはモーターがあり、その動力が天井に吊るされたベルトに伝わって、織機が稼働する仕組み。



上/織機に刻まれた「豊田式織機株式会社」の文字。1915年製で現役なのは、祖父から三代に渡って大切にメンテナンスしてきたからこそ。中上・中下/企業内訓練校「トヨタ東日本学園」の生徒達が修理した部品。鋳物で型から十数点制作し、工場を訪れて取り付けてくれた。

意図せず立ち返った原点

「トヨタ東日本学園の生徒さん達は、一期生から今の十一期生まで、毎年研修に来てくれる。『トヨタの原点を知れ』という白根社長の言葉をずっと守っているんだね。学内発表会で、壊れた織機の部品を作って、社員と一緒に取り付けに来てくれたこともあった」
若柳地織は、トヨタ自動車の社内表彰トロフィーの敷物や、お客様へのノベルティに使われたこともあり、お付き合いは今も長く続いています。
マスクの製造で

「東日本大震災の後、中日新聞が記事でうちを取り上げてくれたことで、トヨタ自動車のお付き合いが始まった」
工場の壁に貼られた新聞記事の日付は、今から十一年前、平成二十四年二月二十六日。第一面には織機を操作する千葉さんの大きな写真が。
「震災の一年後、津波被害の取材に来ていた記者が、内陸でもひどいところがある、とうちの話聞いて取材に来てね。中日新聞だから、トヨタ自動車の人達が見ないわけがない。それで記事が出て数日後、電話が来たの」
その電話の主は白根武史さん。当時関東自動車工業の顧問で、その年の七月に発足するトヨタ自動車東日本の初代社長となる人でした。
「今度新しくできる会社の社長になる白根と言います、って。ちょうど豊田佐吉生誕一五〇周年の新聞記事を作っているところで、織機を探していたけど見つからない。そしたら中日新聞に写真が載っていた、と」
ほどなく千葉さんの元を訪れた白根社長（当時）は、織機を見学して、千葉さんにこう言います。
『今この部品はないでしょう。壊れたら作ってあげるから』
その後、白根社長の訪問は十数回に及びました。
「ちょうど織機の生命部分の部品が折れてしまった時、白根社長に電話して、社長、とうとうやりましたと言ったら、『あ、そう』って」
あまりにあっさりとした反応に、少し戸惑った千葉さんでしたが、すぐにトヨタ自動車の社員が工場を訪れます。「今、トヨタは鋳物をやっていないの
新型コロナウイルス感染症が拡大した年、欠かさず出店していた首都圏の物産展をはじめ、販売会は軒並み中止。既存の商品の引き合いが激減するなかで、千葉さんは試行錯誤の末、3か月をかけて若柳地織のマスクを開発しました。
「耳が痛くならないように、ひもを調節できるようにして。表と裏の両方で使えるようにしたりね」
細やかな心遣いが活きた柔らかなマスクは、コロナ禍でも唯一売れる商品でした。
「元々、肌着やガーゼを織るために発明した織機らしいのさ。だからマスクに一番合ってるんだって気づいた。原点に立ち返ったということだね」
しかし同時に、これから何を作ってゆけばよいのかということを考えさせられたとも言います。
「このマスクが若柳地織の集大成になってしまったような感じ。もうこれ以上のものでできないんじゃないか、と」
それでもまだ自分にできることがあるのではないかと。千葉さんの中には、これからの工芸を担う世代への憂慮もありました。
「若い人たちが入ってこられるように、後押しができればと思って、できるだけ首都圏の催事にも参加してきた。工芸を売るにはお客さんを呼ぶ工夫が必要。ただ時間もお金も掛かる。問題は販路。コロナ以降、変化の速度が倍になっている気がする。自分を含めて大変な事業者も多いと思う。だからこそ変化への対応を急がないといけない」
千葉さんの優しいまなざしに込められた強い思い。自問は続いています。

千葉孝機業場
栗原市若柳字川北塚ノ越12
TEL/0228-32-3087
営業時間/お問合せください



「東日本大震災の後、中日新聞が記事でうちを取り上げてくれたことで、トヨタ自動車のお付き合いが始まった」
工場の壁に貼られた新聞記事の日付は、今から十一年前、平成二十四年二月二十六日。第一面には織機を操作する千葉さんの大きな写真が。
「震災の一年後、津波被害の取材に来ていた記者が、内陸でもひどいところがある、とうちの話聞いて取材に来てね。中日新聞だから、トヨタ自動車の人達が見ないわけがない。それで記事が出て数日後、電話が来たの」
その電話の主は白根武史さん。当時関東自動車工業の顧問で、その年の七月に発足するトヨタ自動車東日本の初代社長となる人でした。
「今度新しくできる会社の社長になる白根と言います、って。ちょうど豊田佐吉生誕一五〇周年の新聞記事を作っているところで、織機を探していたけど見つからない。そしたら中日新聞に写真が載っていた、と」
ほどなく千葉さんの元を訪れた白根社長（当時）は、織機を見学して、千葉さんにこう言います。
『今この部品はないでしょう。壊れたら作ってあげるから』
その後、白根社長の訪問は十数回に及びました。
「ちょうど織機の生命部分の部品が折れてしまった時、白根社長に電話して、社長、とうとうやりましたと言ったら、『あ、そう』って」
あまりにあっさりとした反応に、少し戸惑った千葉さんでしたが、すぐにトヨタ自動車の社員が工場を訪れます。「今、トヨタは鋳物をやっていないの
新型コロナウイルス感染症が拡大した年、欠かさず出店していた首都圏の物産展をはじめ、販売会は軒並み中止。既存の商品の引き合いが激減するなかで、千葉さんは試行錯誤の末、3か月をかけて若柳地織のマスクを開発しました。
「耳が痛くならないように、ひもを調節できるようにして。表と裏の両方で使えるようにしたりね」
細やかな心遣いが活きた柔らかなマスクは、コロナ禍でも唯一売れる商品でした。
「元々、肌着やガーゼを織るために発明した織機らしいのさ。だからマスクに一番合ってるんだって気づいた。原点に立ち返ったということだね」
しかし同時に、これから何を作ってゆけばよいのかということを考えさせられたとも言います。
「このマスクが若柳地織の集大成になってしまったような感じ。もうこれ以上のものでできないんじゃないか、と」
それでもまだ自分にできることがあるのではないかと。千葉さんの中には、これからの工芸を担う世代への憂慮もありました。
「若い人たちが入ってこられるように、後押しができればと思って、できるだけ首都圏の催事にも参加してきた。工芸を売るにはお客さんを呼ぶ工夫が必要。ただ時間もお金も掛かる。問題は販路。コロナ以降、変化の速度が倍になっている気がする。自分を含めて大変な事業者も多いと思う。だからこそ変化への対応を急がないといけない」
千葉さんの優しいまなざしに込められた強い思い。自問は続いています。



左/豊田式鉄製小幅動力織機（Y式）。豊田佐吉が1915年に開発した織機で、ガーゼなど薄地織物の生産に使われ、4万3千台が生産された。下/トヨタ自動車との接点のきっかけとなった中日新聞の記事。



に、わざわざ型から鋳物で部品を作ってくれた。数日だよ」
トヨタ自動車の手厚い対応に、千葉さんは心の底から感激したと言います。「子どもの頃から、この織機は豊田佐吉という人が作ったんだよ、と教えられて育ったけど、こんな風にトヨタの方達に大切にしてもらえるなんて思わ